

特集

東成区の都市景観資源

わがまちナイススポット

大阪市では、東成区の都市景観資源の発掘のため、東成区未来わがまち推進会議との連携により「わがまち自慢の景観」を募集、大阪市都市景観委員会の審議を経て、平成23年7月1日に9件を都市景観資源に登録。また、令和4年3月31日に1件を登録解除し、新たに2件を追加登録しました。

- 1 北中道の古い街並み
- 2 旧三井釦被服
- 3 真言宗御室派密峯山妙法寺
- 4 八王子神社御旅所の楠
- 5 東小橋の街並み
- 6 火袋式道標
- 7 矢田地蔵尊
- 8 深江の建築物、史跡群
- 9 コイズミ緑橋ビル
- 10 鶴橋駅（東小橋）周辺のレトロなアーケード商店街



1 北中道の古い街並み



かつて平野川(ひらのがわ)と暗越奈良街道(くらごせならがいのう)とが交差する玉津橋は、交通の要所として賑わっていた。玉津橋西詰を北に入ると、通りの両側に蔵や板塀のある民家が連続しており、古い街並みを形成している。

所在地 中道4丁目16番、17番



講評

通りの西側には板塀のファサードを持ち、蔵のある大きな屋敷が連続する。東側には石塀のファサードで洋館風の屋敷があり、歴史的な雰囲気を感じる街並み景観を形成している。東側の新築住宅も街並みに馴染むファサードデザインを施した形跡が見られ、都市景観資源の登録により、まち全体の意識向上が期待できる。

2

きゅう みつ い ぼたん ひ ふく
旧三井釦被服

所在地 大今里4丁目27番22号



今里周辺には明治中期から大正にかけてボタンや被服の製造に携わる事業者が数多く存在した。そのなかで三井釦被服は最も大きな事業者であった。

この建物は、昭和初期に軍の要請で四条畷市に青年学校校舎として建てられたが、青年学校校舎としては使用されず、小学校仮校舎として使用され、戦後になってから現在の地に移築したといわれる。移設当時から被服製品の販売を行っていたが、後に改装して用途の転用を図っている。移築当時は、左右対称の建物であったが、左側部分が取り壊され、非対称となっている。

講評

地域の産業遺産であるボタン会社の建築物が、ただ単に保存されているのではなく、美容室として活用されている点が貴重である。成り立ちに歴史性があり、現在も外観の維持に工夫されている。大通りに面しており、目につきやすい景観資源である。

3

しん ごん しゅう お むろ は にっ け ざん みょう ほう じ
真言宗御室派密華山妙法寺

所在地 大今里4丁目16番50号



聖徳太子の創建と伝えられる。石山合戦で焼失した本堂は、享保年間(1716年頃)に再建された。近世国学の祖と言われる契沖が、延宝7年(1679年)から元禄3年(1690年)まで住職を務め、ここで「万葉代匠記」を記したといわれ、境内は大阪府の史跡に指定されている。

講評

契沖ゆかりの寺とされ、大黒天が祀られていることでも有名であり、区の観光名所の一つとなっている。契沖の功績が認められて、水戸光圀から贈られた香炉が寺に伝わるなど、歴史的にも貴重な景観資源である。

4

はち おう じ じん じゃ お たび しょ くす
八王子神社御旅所の楠

八王子神社御旅所の楠は、樹齢1300年を数えるとされ、明治18年（1885年）の洪水の際には、周辺住民が楠の上に、いかだを組んで難を逃れたという言い伝えがある。幹周11m、樹高25mで、大阪市の保存樹に指定されている。八王子神社御旅所は、この樹の見事さから楠神社とも呼ばれている。

所在地 大今里1丁目17番10号



講評

八王子神社御旅所の中央に立つ楠は、かなりの迫力がある。御旅所には地蔵尊、幹の上にはお稲荷さんがあり、独特の雰囲気を持っている。地元の人にも大切にされており、地域のシンボルとしての景観を形成している。

5

ひがし お ぼせ まち な
東小橋の街並み

東小橋にある比賣許曾神社の歴史は古く、古事記では新羅から渡来した赤留比売命を祀ったと記され、石山合戦の兵火にあい、現在の地に移ったとされている。比賣許曾神社の周辺は、かつて江戸時代・明治時代の東小橋村の中心であった。現在でも、比賣許曾神社のほか、安楽寺、格子のある民家など、戦災から逃れた昔の街並みが残っている。

所在地 東小橋3丁目6番～9番



講評

大通りから鳥居をくぐって旧東小橋村に入ると、別世界のような路地と神社、古い街並みがある。この一帯は昔の雰囲気が色濃く感じられる。また、古事記に由来する比賣許曾神社は貴重で、街に安らぎの空間を提供している。

6

ひぶくろしきどうひょう
火袋式道標

暗越奈良街道と千日前通が交差する場所に立つ道標。上部を四角にくりぬいて火袋とし、上に笠をのせた形状をしている。

文化3年（1806年）に釘問屋が建てたといわれており、道標には「右志き山、八尾久宝寺道 左いせ、なら道」と示されている。

所在地 大今里4丁目27番



講評

暗越奈良街道沿いにあり、江戸時代に街道を通る旅人が目印にしたことを彷彿とさせる。道標そのものは小さいが、火袋のある道しるべは珍しく、当時の夜の景観を思い起こさせる。特徴的な形態をしていること、三叉路にあたる角地にあることで、景観資源としての存在感がある。

7

やたじぞうそん
矢田地蔵尊

玉造駅から東に入った暗越奈良街道沿いにある。峠越えをして奈良へ行くときに、ここで願掛けをしたといわれている。奈良の矢田寺に縁のある地蔵で、地蔵堂の中央に安置された石の地蔵尊には、矢田寺への道しるべが彫られている。

所在地 東小橋1丁目4番2号



講評

美しく手入れがなされ、地元の人による花が供えられている。遠方からも多くの人がお参りに来るといい、地蔵盆には多くの人で賑わうという。地域に密着した商店街の風景にもよく馴染み、ほっとする景観を形成している。

8

ふか え けん ちく ぶつ ぐん
深江の建築物、史跡群

所在地 深江南3丁目5番～22番



昔、良質の菅の生い繁った深江の地に、笠を縫うことを職業とした大和の一族が集団移住したことが始まりと伝えられている。菅笠・菅細工などの伝統文化が現在も継承され、伊勢神宮式年遷宮に使用する菅笠を納めている。

深江集落には、笠縫邑跡^{かさぬいむらあと}として史跡に指定されている深江稲荷神社、法明寺^{ほみょうじ}などがあり、茅葺屋根形状の家屋、蔵、地蔵堂も多く見ることができるほか、深江郷土資料館では、第60回式年遷宮（1973年）の際に奉納されてから40年以上の時を越え、下賜された菅の大笠を見ることができる。

講評

風格のある古い建築物が点在しており、菅笠づくりで栄えた深江村の歴史を感じることができる、「まちあるき」の絶好のエリアとなっている。地区で広く街並みや建築物、庭園、菅田、菅笠製造などを保存しようとしており、全体として高く評価されるべきである。

9

みどり ばし
コイズミ緑橋ビル

所在地 東中本2丁目3番5号



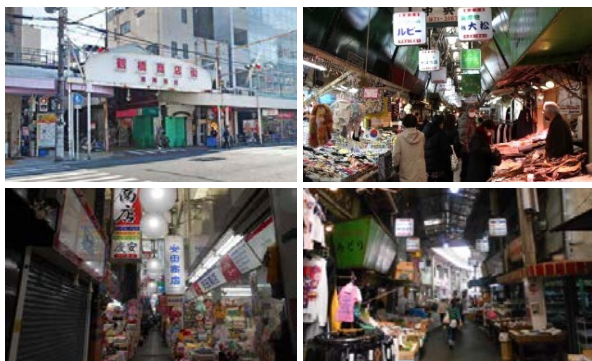
2017年3月竣工の「あかりの杜」をコンセプトに環境と緑化に配慮した建物としてデザインされた、照明器具会社の研究開発センターである。住宅地側をセットバックし、階段状の緑化バルコニーとすることで圧迫感を軽減し、周辺地域に空・光・緑を共有している。

2018年に、おおさか優良緑化賞「大阪府知事賞」「生物多様性賞」、おおさか環境にやさしい建築賞「事務所部門賞」、照明学会照明普及賞、日本建築協会「建築と社会」賞作品部門受賞、2019年には、大阪都市景観建築賞(大阪まちなみ賞)緑化賞と多数受賞している。

講評

階段状の緑化バルコニーによる立体的な緑景観が、周囲に良好な景観と環境を広く提供している。また、隣接敷地の道路際に点在する植込み等との連続性が、まちの生物多様性に貢献する建築緑化の好事例として評価できる。

10

つる はし えき ひがし お ばせ しゅう へん しょう てん がい
鶴橋駅(東小橋)周辺のレトロなアーケード商店街

所在地 東小橋3丁目



鶴橋駅東側に面的に広がる商店街群(鶴橋商店街、大阪鶴橋市場商店街、東小橋南商店街)である。

近鉄とJR(旧国鉄)が交わる鶴橋は戦前から交通・物流の要衝であったが、戦時中の空襲でもこれらの鉄道は大きな被害を逃れ、昭和21年(1946年)頃にはいくつかの商店街が編成され、現在の商店街の原型が出来始めた。様々な商品を扱うお店が並んでいたことから「鶴橋に行けばなんでも揃う」と言われ、現在は多くの訪日外国人観光客や、韓流ブームに魅了された多くの女性ファンが足を運び、韓国の文化に触れることができる場となっている。

講評

商店が群をなすことで境界景観を形成するとともに、地域固有の歴史・文化性を継承するシンボル景観として評価できる。



東成区の地域資源と名産品

1 暗越奈良街道 くらがり ごとえ なら かい どう

大阪から奈良へ通じる旧街道として、4～500年前に開けた街道で、大阪高麗橋を起点に西から東へと通じ、生駒山系の暗峠を越えて奈良への最短コースでした。区内玉造から中道を通り、玉津橋を右手に曲がり、東成警察署前から大今里に入り、深江から河内平野を東へ生駒山を越えて奈良に通じます。江戸時代中頃から、全国的にお伊勢参りが盛んとなり、多いときで1日7～8万人の旅人で賑わったといわれています。

大今里3丁目14番、旧街道と今里筋が交差するあたりに設置されている「いまざとならみち」の道標近くには、暗越奈良街道の大きな看板が設置されています。





成瀬 國晴 作

～シルクロードの終わるところ～(大今里3丁目14番)

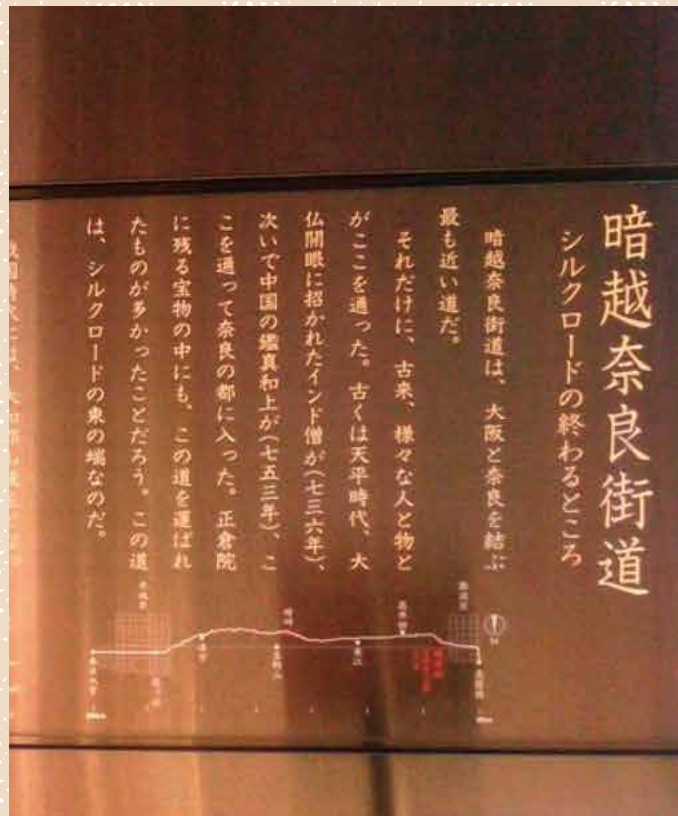
暗越奈良街道は、大阪と奈良を結ぶ最も近い道だ。

それだけに、古来、様々な人と物とがここを通った。古くは、天平時代、大仏開眼に招かれたインド僧が(736年)、次いで中国の鑑真和上が(753年)、ここを通過して奈良の都に入った。正倉院に残る宝物の中にも、この道を運ばれたものが多かったことだろう。この道は、シルクロードの東の端なのだ。

戦国時代には、大和郡山城主となった豊臣秀長が何度も往来したことだろう。百年余を経た元禄7年(1694年)、松尾芭蕉がここを大阪へと歩いていった。そして、それから十年後(1704年)、大和川の付替えて、沿道の景観は一変した。多くの川や沼が消え、豊かな綿畑に代わったのだ。

翌年(1705年)伊勢参りが爆発的に流行した折には、一日7万人がこの道を伊勢に向かっていった。この道は、伊勢街道のはじまりでもあった。

堺屋 太一



2 二軒茶屋・石橋旧跡碑



所在地 東小橋1丁目2番

鶏鳴舎 暁晴／編輯「浪華の賑ひ」（1855年刊）大阪市立図書館デジタルアーカイブより

江戸時代から暗越奈良街道が人の往来も盛んとなり、この街道の起点であった玉造に「つるや」「ますや」という二軒の茶屋が建てられ、旅人等の休息の場として繁昌したと伝えられています。茶屋が二軒あったところから“二軒茶屋”といわれ世に広く知れわたりました。

この二軒のそばを流れていた猫間川ねこまがわに宝永8

年（1711年）に幕府の命によって橋が架けられたのが“石橋”です。正式には黒門橋というが、この付近にあった大阪城の玉造門が黒い門であったところから黒門橋と名づけられ、この橋が大阪では当時珍しく石で造られたものだったので通称石橋と呼ばれていました。

3 東成しんみちロード



今里ロータリー（交差点）を250mほど北上すると、商店街のアーケードの入口が現れます。いくつもの商店街が東西に一直線に続く、昔ながらの店舗が残る情緒豊かな商店街です。「新道」の名は、暗越奈良街道とは別に東西に新しく道が開かれたところによります。



アーケードを抜けたところで平野川分水路にかかる新道橋は、欄干にちょっとした休憩や語らいのできる作り付けのベンチが設置されており、水上のポケットパークとして地域の人々に親しまれています。

4

たま つくり くろ もん しろ うり
玉造黒門越瓜

豊臣時代、大阪城玉造門付近の黒門橋付近が発祥の地と考えられています。天保7年(1836年)の「名物名産略記」にも記載があり、当時の今里・片江・深江あたりでも栽培されていました。

粕漬けにしておいしかったことから名産になり、東成区のマスコットキャラクター「うりちゃん」のモデルにもなっています。



5

「松下幸之助起業の地」顕彰碑

松下幸之助氏は大正6年(1917年)に22歳で独立。当時の東成郡鶴橋町大字猪飼野1399・1400番地(現:玉津2丁目)の借家で、改良ソケット作りを始めました。その後、松下氏は福島区に移り、「松下電気器具製作所」を立ち上げ世界的な企業に発展させることとなります。その起業の地が東成区にあったことが明らかになり、平成16年に顕彰碑が建立されました。碑文には東成の地がものづくり文化の風土を培ってきたことが記されています。



6

四代目桂米團治顕彰碑



四代目桂米團治は、現在の東成区役所駐車場にあたる地に住んで、「中濱代書事務所」を開業し、その代書業の体験を元に後に上方落語の傑作ともいわれる「代書」を生みだしました。平成21年は落語「代書」の初演70周年にもあたり、「中濱代書事務所」の地に顕彰碑が建立されました。



7

「芸人の町・片江」顕彰板

昭和のはじめには、東成区は上方落語や漫才などの大衆演芸と縁が深く、片江地域を中心に多くの芸人さんが住まい、活動の拠点にもなっていました。そうした事実は、現代の芸人さんはもちろんのこと、区民の皆さんにも次第に忘れ去られようとする中、平成22年6月に市民グループ「東成芸能懇話会^{ひがしなりげいのうこんわかい}」により、片江地域（大今里南3丁目11番）に「芸人の町・片江」の顕彰板が設置されました。当時、片江地域に居をおいていた、5代目笑福亭松鶴は自宅を「楽語荘」と名付け、同人を募り、上方落語の保存と新人落語家の育成に尽力したことは、現在の上方落語の隆盛の礎になっていると考える落語ファンも多いそうです。



8

深江の菅笠

昔、深江は良質の菅草が豊かに自生する浪速の一島でしたが、第11代垂仁天皇の御代に、大和国笠縫邑やまとのくにかさぬいむらより、笠を縫うことを仕事とした一族が移住し、代々菅笠を作ったことから、笠縫島といわれるようになりました。以後、歴代天皇御即位、大嘗祭の時をはじめ、20年に一度の式年遷宮に使用する菅笠はすべて深江で作られ献上してきました。江戸時代中頃から全国的に流行したお伊勢参りでは、大阪玉造の二軒茶屋を起点として、伊勢音頭をうたいながら、集団で参宮したのですが、人々は道中の安全を願って、(菅には浄めるはたらきがあると信じられていました)深江で菅笠を買い求め賑やかに旅をしました。江戸時代の末期からは菅の釜敷きや、瓶敷き、皿敷き(今のコースターのようなもの)などの菅細工も作られ、皿敷きは明治や大正の頃は、イギリスやアメリカにも輸出されました。大阪市指定文化財の指定を受けて、菅細工の保存活動をしている「深江菅細工保存会」を中心に今日まで2000年もの間、大切に受け継がれています。



大阪深江郷土資料館（深江南3丁目16番14号）